

薫小学校研究推進校だより

30・10・15 No.1



～「主体的・対話的で深い学び」を通した学力向上めざして～

本校では、「主体的・対話的で深い学びを通した学力向上をめざして」を研究主題に、「学びの楽しさを実感し、ともに高め合う授業づくり」を副主題に設定し、今年度から授業実践に取り組んでいます。研究の概要と授業の実践について紹介します。

《研究の概要について》

今年度は、研究計画の1年次であることから、「学びの楽しさ」をキーワードにして単元の構想や授業づくりを進めていきます。子どもが意欲を持って課題に臨み、学びを通して獲得した知識や理解・技能・思考等をもとに、「やってみたい」「知らせたい」「教えたい」「試してみたい」といった次の学びにつながることをできるように、学びの楽しさを実感できる授業づくりを目指すことで、本校の子どもたちの課題である主体性を伸ばし、思考力や表現力といった活用力を高めることができるであろうと考えます。さらに、授業の中で教え合ったり学び合ったりする過程を通して、学びの楽しさを実感したり、自己有用感や自己肯定感を高めたりして、次の学びの意欲や学びに対する主体性を醸成できるような、日々の授業の質的改善を図っていくようにしていきます。

《授業改善の視点について》

学びの楽しさを実感できるような手立てとして、以下の12項目を掲げ、授業の各場面ごとにそれぞれを適宜取り上げ、子どもたちの主体的な学びを促すようにします。

- 【視点①】 問題の持つ適度な難易度に対して、挑戦したい、解決したいという意欲が喚起できるようにする。
- 【視点②】 前時の学習内容や既習事項とのズレを感じ取ったり、思考を組み合わせたりして課題解決の見通しを持つ必要感を持たせる。
- 【視点③】 既習事項や学習アイテム、子ども同士のつばやきを生かして、個人差に応じた解決の見通しを持たせる。
- 【視点④】 既習事項や学習アイテムなどを活用して、一人一人が自力解決し、自分の考えを持つことができるようにする。
- 【視点⑤】 自分の思いや考えを表現できるように活動の場や時間を確保する。
- 【視点⑥】 ペアやグループでの交流を通してわからないことや疑問に思うことを友達同士で教え合い解決できるようにする。
- 【視点⑦】 話し合いを通して、友達の考えを聞いて自分の考えを確認したり、よりよい考えに気づいて修正を図ったりして自分の考えに自信を持たせるようにする。
- 【視点⑧】 間違えても個々の考えが受容されて、授業の中で生かされるような教師のコーディネートやフォロー的な支援とともに、子ども相互に友達の考えを想起させることで、思考の共有化を図り、個々の考えが生かされるようにする。
- 【視点⑨】 ペアやグループ、全体場で発表の機会が保障され、発言に対して建設的な意見を出し合える雰囲気をつくり、安心して学習に臨める環境をつくるようにする。
- 【視点⑩】 よりよいアイデアや考えを全体場で称賛し、価値づけすることで、自己有用感を持たせるようにする。
- 【視点⑪】 学びの振り返りを通して、問題解決の楽しさを実感し、更に学びたいという意欲や探究心を喚起する。また自分や友達のよさを認め合うことができるようにする。
- 【視点⑫】 問題作りや新聞作りなどの活用学習の場を設定したり、家庭学習と連携して、学習内容から関連した課題に取り組んだり、補充的な学習に取り組んで習熟を図ったりするなど、学年の段階に応じて自主的に取り組む活動を促すようにする。

《授業の実際から》

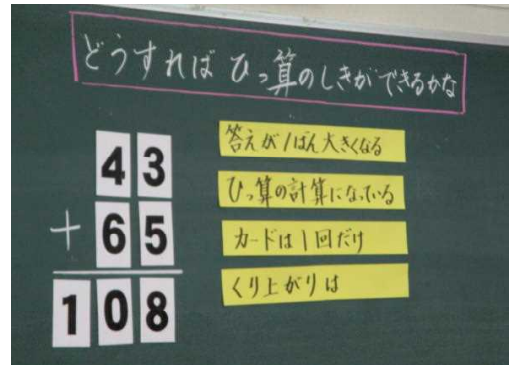
2 学年の算数科では、「たし算とひき算のひっ算」の活用学習として、教科書巻末の補充問題を取り上げて、カードを並び替えて条件に応じた筆算をつくる授業を行いました。

【視点①】課題提示の工夫

問題 0 から 9 までの 10 まいのカードが 1 まいずつあります。
つぎのひっ算の答えが一番大きくなるように、たし算を
つくりましょう。 ※提示の際に下線部は隠して提示

$$\begin{array}{r} \square\square \\ + \square\square \\ \hline \square\square\square \end{array}$$

はじめに、問題の途中を隠した文と穴埋めの筆算式を提示して、子どもたちの「あれっ。」「何かあるぞ。」という意識を持たせてから、筆算の答えが一番大きくなるようにたし算をつくろうという条件を提示しました。子どもたちの解いてみたいという意欲の高まりが見られました。



【誤答提示による解決の見通しの確認】

【視点②】認識のズレを生かした見通しの持たせ方

教師側から、一番大きな答えになればいいからということで、9 から順にカードを並べて $43 + 65 = 987$ という間違っただけを敢えて提示することで、「違う。」「おかしい。」という声が一斉に上がり、その理由を聞きながら、解決の見通しを確認しました。

【視点⑥、⑦】ペアやグループでの交流と再試行



【ペアでの交流と思考の見直し】

自力解決が終わった子から、交流を始めました。ペアや小グループになって自分の考えを、順序を表す言葉を使って説明したり、筆算式を指差したりしながら答えの導き方を説明しました。

お互いの答えを見比べたときに、一番大きな答えになるという条件に気づいて、友達よりも大きな答えになっているかを考えました。友達の考えと自分の考えとを見比べて、カードの組み合わせを再度見直して、もっと大きい数にならないかという再試行が始まりました。1 枚だけしかカードは使えない条件から答えを導き出しても、もう一つの条件である一番大きな答えを考えないといけません。

【視点⑩】個々の学びの価値づけ

全体の発表の場では、意図的に答えが小さい順に指名して発表しました。ほとんどの子が筆算の計算の手順通りに、一の位から順に説明していました。計算式は合っているのに、周りの反応はよくありません。

最後に、 $82 + 94 = 176$ という計算式を書いた子が発表しました。一番大きな数の組み合わせは、十の位の計算で $9 + 8 = 17$ になるから、十の位と百の位が決まってくる。つぎに残りの一の位の計算を考えて、繰り上がりがあると 18 になってしまい、同じ数を 2 回使ってしまうから、繰り上がりはなしになること、残った数で一番大きいのは 6 だから、6 になる組み合わせは $2 + 4 = 6$ になることを説明しました。一番大きな答えにするには、大きな位から考えること。カードは一度だけしか使えないという条件から繰り上がりの有無を判断することを知って、「あっそういうことか。」と納得した声が上がりました。この考えのよさを全体で称賛し、学びの価値付けを行いました。

【視点⑪】学習感想による学びの振り返り

授業の終わりに、学習感想を書いて、本時の学習を振り返りました。子どもたちからは、「今までの問題で一番難しかったけれど、楽しかった。」「大きな数を考えるときは、計算とは逆に十の位から考えることが分かった。」「今度やるときはできるようになりたい。」などと、難易度が高い問題にも関わらず、意欲的に取り組み、学びの楽しさを実感した子どもたちでした。